



きずな

2014年
(平成26年)

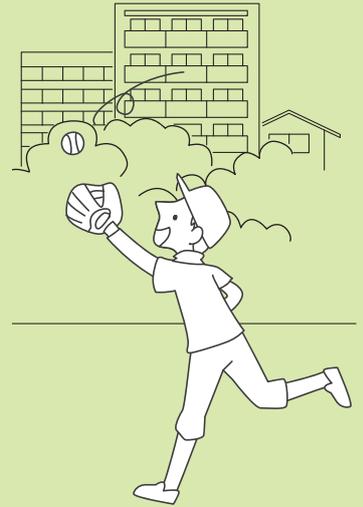
3



みんなでささげると
輝くいのち

特集テーマ

いのち



3月

自殺対策強化月間

最近の自殺をめぐる厳しい情勢を踏まえ、内閣府が2010(平成22)年に月別自殺者数の最も多い3月に制定。国や地方公共団体、関係団体等が連携して、重点的に広報啓発活動を展開するとともに、各種団体からの協賛も得て、当事者(自殺企図者)や家族が支援を求めやすい環境づくりを進めます。

2 赤ちゃんの健やかな成長のため
産後のケアも大切に

毛利助産所(神戸市東灘区)

3 いのちの終わりに見えること

徳永 進さん(野の花診療所 院長)

4 悩んでいる人に気付く
"ゲートキーパー"を育成

竹内志津香さん
(NPO法人ゲートキーパー支援センター 理事長)

5 災害に強い社会のその先へ

松田曜子さん
(関西学院大学災害復興制度研究所 研究員・准教授)

6 Stand by me

村松淳司さん(東北大学多元物質科学研究所 教授)

7 HIVとともに生きる

池上千寿子さん(NPO法人ぷれいす東京 理事)

8 情報ぶらさ



赤ちゃんの健やかな成長のため 産後のケアも大切に

毛利助産所（神戸市東灘区）

1959（昭和34）年に開業した神戸市東灘区の「毛利助産所」。1995（平成7）年の阪神・淡路大震災では建物が全壊し、当時所長だった毛利種子さんは失意のどん底に突き落とされました。震災から3カ月後、種子さんは知人の出産を手伝うことになり、そこで、生まれてくる命の輝きにあらためて感動し、助産所の再開を決意。聖路加看護大学で教壇に立っていた次女の多恵子さんも加わり、再スタートを切りました。

2007（平成19）年に所長に就いた多恵子さんのモットーは、古くから伝わる助産の知恵と最新の医療知識を合わせ、妊婦一人ひとりに最適な出産の場を整えること。「出産は新しい家族が増えること。パートナーや子どもたちが立ち会うのは大歓迎です。妊娠中から出産、そして産後ケアまでしっかりとしたサポートを心掛けていきます」

毛利助産所で出産した女性は「ス

特集

いのち

みなさんは「いのち」について考える機会がありますか。多くの犠牲者が出たフィリピンや伊豆大島の台風被害は記憶に新しく、事故や事件に巻き込まれて「いのち」を失うこともあります。また、自殺の問題も依然深刻な状況です。このような「いのち」に関わる問題は多くありますが、一方では、互いに支え合って「いのち」を守る取り組みも行われています。生きることの素晴らしさについてあらためて考え、かけがえのない「いのち」を見つめ直してみましよう。

経験豊富なスタッフの皆さん。
前列右が毛利多恵子所長



新しい命の誕生を喜ぶ家族



タッフの皆さんはとても親切で、母親と赤ちゃんを大切に思ってくれていると感じました。次の子を産む時も毛利さんのお世話になりたいと思いましたが」と振り返ります。

出産後、自宅に帰った母親の中には家事と育児が重なり、疲れてしまう人もいます。そこで、母親が体を休めたり、母乳育児に慣れたりするための「産後入院」や「母乳育児ショートステイ」を設定。他の産婦人科などで出産した人も受け入れています。

「出産後の生活で多分にストレスを抱えてしまうと、これから先の子育てにも悪影響を及ぼすこともあります。お母さんが癒やされることで、愛情あふれる育児につながればと考えています」と多恵子所長は話します。

毛利助産所

神戸市東灘区御影石町4-13-3
TEL 078(841)2040

いのちの終わりに見えるいのち

徳永 とくなが 進 すすむ さん（野の花診療所 院長）

つながる命

本日は、死とそこに見える人権との関わりについてお話ししたいと思います。

高校生のころ、「命の起源」というテーマの講演を聞きました。今何十億もの人が生きています。それ以前にもおびただしい命があり、それらがつながっているのが宇宙の摂理であり、死も決して悲しいことではない、今生きていることの方が奇跡なのだと思います。そして、「死にゆく人の手を握ってあげよう」という気持ちが生まれました。

初めて主治医を任された時、ある先輩から「がんとつなよ、嘘をつくのが医者への礼儀だ」と言われたことがあります。もう手立てがない患者さんに「がんではない」と言いましたが、その患者さんは「ああ、よかった。その一言が聞きたかった」と言われ、死の準備を始められました。私の目が事実をしゃべっていたのでしょうか。告げること、告げないこと、どちらが正しいのか。今は告知が圧倒的であり、日本人も意外と受け入れることができていると思います。当時は告知の仕方一つでも、まだ揺れ動いている時代でした。

声に出せない叫び

ある家族の死に立ち会った時のことです。

お父さんが亡くなる時に、娘さんが「お父ちゃん、死んだらいけん」と叫びました。その心の底から出る必死さ、抱き付く様子に感動を覚えました。これが臨床のスタートでした。どうやったら安らかな死を、無事な死を迎えられるかと、いつも考えています。今もあの時の娘さんの「死んだらいけん」という叫びが残っています。

鳥取に戻って死と向かい合う医療に携わりたいという思いが強くなり、思いやりを持ったケアをしたいと12年前に野の花診療所を開設しました。しかし、最初は患者さんの訴えがなくて困りました。建物だけが立派でも、「助けて」と言う患者さんの声、訴えがなければ始まらないのです。患者さんの訴えが原点であるとあらためて感じました。人権も同じですね。誰かが叫んでいる。すべてがそこから始まる。社会の見えない水面下で誰かが声に出せない叫びを上げている。それを感じ取れるようになりたいですね。

終わり新たな始まり

亡くなっていく人を見て思うことは、どの人も立派だということです。最終的に抵抗なく死を受け入れる姿に尊敬を覚えます。ある患者さんが命の終わりに行きたい所があると

言われました。それは、以前働いていた飯場でした。仲間や職場を愛していたのです。ある人はドライブや旅がしたい、ある人は田んぼの土を踏みたいと言われます。人が死ぬ前に望むことは、当たり前なことであり、ごくありふれた日常のことなのです。

死は終わりであると同時に、また新たな始まりでもあります。そこには終わるものと始まるものが混在しています。ハッピーエンドで終わるわけがなく、始まる何かがあります。それが悲しみだったり、別の旅だったりするのではないかと思います。

※2013（平成25）年12月「人権のつどい」における徳永さんの講演内容を（公財）兵庫県人権啓発協会がまとめました



プロフィール 1948（昭和23）年、鳥取県生まれ。京都大学医学部を卒業後、京都府や大阪府の病院、診療所を経て、鳥取赤十字病院の内科医に。2001（平成13）年、鳥取市内でホスピスケアのある19床の有床診療所「野の花診療所」を開院。1982（昭和57）年、「死の中の笑み」（ゆみる出版）で、第4回講談社ノンフィクション賞を受賞。1992（平成4）年には独自の信念で地域医療をしている人に贈られる第1回若月賞を受賞。著書に「医療の現場で考えたこと」（岩波書店）、詩人の谷川俊太郎さんとの共著「詩と死をむすぶもの」（朝日新聞出版）など多数。

この人に
聞く!

悩んでいる人に気付く 「ゲートキーパー」を育成

たけうち
しづか
竹内 志津香 さん

(NPO法人ゲートキーパー支援センター 理事長)

内閣府によると2013(平成25)年の自殺者数は2万7195人。交通事故死者数をはるかに上回る多くの尊い命が失われています。「NPO法人ゲートキーパー支援センター」は、人生に思い悩む人に必要な支援を行い、自殺するのを防ぐ「ゲートキーパー」の育成に取り組んでいます。



Q ゲートキーパーとは。

A 人生に悩んでいる人に気づき、声を掛けて話を聞き、必要な支援につなげ、見守る人のことです。支援する温かい気持ち、少しの知識と聴き方の技術があれば、ゲートキーパーの役割を果たせます。

Q ゲートキーパー支援センターを設立したきっかけは。

A かつてキャリアコンサルタントとして働いていたころ、「自殺したい」と相談に来る人の多さに驚きました。思い詰めた人たちにもっと寄り添いたいと考え、カウンセラーの資格を取得。自殺者予防に取り組んでいるルーテル学院大学の福嶋喜代子教授からゲートキーパーについて学んだ後、仲間と共に2012(平成24)年にセンターを立ち上げました。

Q どんな活動をしているのですか。

A ゲートキーパーを養成するための講



座を近畿各地で開いています。また、スタッフが企業や団体の研修会に出向く講師派遣事業、カウンセリング事業なども手掛けています。

Q どんな講座があるのですか。

A 「悩みの聴き方レッスン」や「ゲートキーパー入門講座」「自殺危機初期介入スキルワークショップ」など段階に応じたメニューを用意しています。ゲートキーパーとしての支援は話を聴くことが大切です。例えば、悩み疲れきっている人は「頑張って」と言われるのもつらいものです。講座では、どのように話を聴き、声を掛ければいいのかを考えます。

Q これまでの受講者数は。

A 400人以上です。その中には家族を自殺で亡くした人もいます。人生に思い悩む人に寄り添い、自殺を防止したいという思いで受講し、身の回りで悩んでいる人を支えています。

NPO法人ゲートキーパー支援センター

ゲートキーパー支援 検索 問い合わせはホームページへ

じんけん情報 「いのちの電話・自殺防止電話相談」のご案内

あなたは決して一人ではありません。悩みがあれば気軽にご相談ください。



兵庫県 いのちと心のサポートダイヤル	短縮ダイヤル # 7500 (ダイヤル電話、スマートフォン、携帯電話、IP電話、PHS、県外の方はTEL 078 (382) 3566)	月曜～金曜 18:00～翌 8:30 土曜、日曜、祝休日 24時間
神戸いのちの電話	TEL 078 (371) 4343	月曜～金曜 8:30～21:30 土曜 8:30～日曜 16:30 (32時間) 祝休日 9:30～16:30 第4金曜 8:30～日曜 16:30 (56時間)
はりまいのちの電話	TEL 079 (222) 4343	毎日 14:00～翌 1:00
自殺予防いのちの電話	☎ 0120 (738) 556	毎月 10日 8:00～翌日 8:00

災害に強い社会のその先へ

まつだ ようこ
松田 曜子さん

(関西学院大学災害復興制度研究所 研究員・准教授)



東日本大震災から間もなく3年がたちます。災害は多くのことがらを教訓として残し、私たちはそれを次の災害で生かそうとします。古い教訓としては、東北沿岸部の神社に残された過去の三陸津波の記念碑を見直し、今後のまちづくり役に役立てようとする動きが見られます。「津波の被害を忘れまい」という思いを込めて記念碑を建てた明治や昭和の村人たちは「見直すのが遅い」と腹立たしく思っているかもしれません。

一方、教訓が簡単には生かせない場面もあります。例えば、仮設住宅での孤独死が問題となった阪神・淡路大震災の教訓から「仮設住宅への入居はコミュニティ単位で行う」ことが良しとされてきました。東日本大震災でも同様の政策が取られてきましたが、東北のようにもともと共同体が強い地域で、共同体の結束のみを強調する避難生活は、かえって排除の機能を強めることになりかねないと、岩田正美氏(※)は指摘しています。これは、もともと村落の中で孤立しがちだった人が、仮設住宅に村落ごと移ることにより、より声を上げにくい構造を作り出してしまわないかという危惧です。この例だけを見ても、復興政策にも地域防災政策にも

絶対の正解はなく、それぞれの地域で背景や人口構成などを反映しながら、その地域に即した最適策が必要なのがわかります。にもかかわらず、復興や防災施策はスピードが求められるためか、どうしても地域の背景を無視して画一化されてしまう傾向にあります。

それを防ぐために一つ言えるのは、防災を防災の専門家だけに任せないということです。行政であれば防災担当部署だけに任せないとなりますし、地域であれば自主防災組織の役員だけに任せないと言い換えられるでしょう。防災の専門家は「災害から命を守る」目的に向かって突っ走ろうとしますが、本来私たちがめざしているのは、災害に強いだけではなく、その先にある暮らしやすい社会であるはずで、環境、福祉など関心はさまざまであっても「その先」に何を見据えているかお互いに確認するひと手間が「連携」につながり、ひいては地域に住む一人ひとりが守られる社会へと進む近道になると考えています。

プロフィール 千葉県生まれ。2007(平成19)年、京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。工学博士。京都大学防災研究所で地域コミュニティでの災害に対する備えについて研究する。2012(平成24)年から現職。NPO法人レスキューストックヤード理事も務める。東日本大震災では日本財団ROADプロジェクト事務局として足湯ボランティアを派遣するなど幅広く活動している。

※ 岩田正美「震災と社会的排除」pp. 33 - 40, POSSE Vol.12 (2011.8)

ま、ず、た、よ、ら、い、ぶ、り、りー
おすすめの一冊



はなちゃんのみそ汁

安武信吾・千恵：はな著(文藝春秋)

小学3年生のはなちゃんは今5歳の誕生日から毎朝、みそ汁を作っています。それは「食べることは生きること。一人でも生きられる力を身につけて」と、33歳で亡くなった母千恵さんと約束したから。千恵さんは20歳代で乳がんの手術をし、結婚、出産を経て、がんが全身に転移するという過酷な人生を歩きました。

本書は、千恵さんの闘病生活と愛娘はなちゃんへの思いを夫の信吾さんがつづつたものです。千恵さんが闘病中に始めた人気ブログ「早寝早起き玄米生活」のことや、娘に遺した「食としつけ」、信吾さんがはなちゃんと二人家族になった現在までを描いています。親として自分は子どもに何を遺すことができるのかを考えさせられる一冊です。

Stand by me ～被災地支援を通して感じる命～

村松 淳司さん（東北大学多元物質科学研究所 教授）

深く傷ついた心

2011年3月11日14時46分、経験したことのない揺れを経験した私は、最初はそれが今まで備えてきた来たるべき大地震とは思わなかった。だが、その揺れは大きく、またしつこいように襲ってきた。頭の中では津波のことばかり考えていた。内陸にいた私は咄嗟に知り合いのいる宮城県南三陸町の志津川の景色を頭に描いていた。それが、東日本大震災そのものだった。

ようやく自分の家の片づけを終え、かつ大学の被災状況を把握し、時間的余裕ができた次の週に志津川を訪れた。私はその惨劇の舞台を見て言葉を失った。この日以来、数か月は涙枯れることなく心に大きな衝撃を受け、全く眠らない日々を送ることとなった。次の週に訪れた私ですらこの状態だから、その瞬間にかけがいのない人を目の前で失った人たちの心と与えた衝撃は、いかにひどかったか。

瓦礫で埋まり廃墟と化した町を歩き、その人を探したがいるはずもなく、母なる海は何の罪もない1万人以上の人を連れ去ったのだった。そして、その一人ひとりの大



切な人の心もことごとく奪ったのだ。子どもたちの心には深い傷跡が残った。1か月後、宮城県山元町の避難所で5歳の男の子が描いた絵を見たボランティアの学生は強い衝撃を受けた。海はどこまでも赤く、人は真っ黒だったというのだ。その学生の心も深く深く傷つくこととなり、やがて私の強い勧めで彼女はその後ボランティア活動から離れることとなる。

支え合う心

避難所に行くと人々は笑顔で応対してくれるし、とても元気だ。被災した人とは思えないくらいバイタリティでいろんなことをやっている。□々にいま踏んばらないとダメだ、震災からの復旧・復興を果たすのだ、という。おばあちゃんが、夜はあちこちで泣いたり、突然大声を出す人もいる、という話をしてくれた。

別の特設避難所（今回の震災は避難所そのものが津波で流されたりして被災し、あちこちに特設の小さな避難所ができた）で、お年寄りに食料は行き届いているか聞いたところ、十分だという。何となく元気がないので、昨日食べたものを聞いたなら、1日におにぎり1個と缶詰1つ。それで十分だという。復旧復興で汗を流している人に食べ物あげろ、という。

仙台市内にも食料を買う長い列ができた。赤ちゃん連れや身重の女性が来ると、皆がその列の先頭に連れていくのを何度も見た。

Stand by me

ボランティア活動は惨劇の舞台からの復

旧から始まった。泥出しや家財の運び出し、そして仮設住宅への引っ越しなど、力仕事から始まった。

仮設住宅。薄い壁、窓、床。

大きな一戸建てで住んでいた人たちがその小さな空間に押し込まれて、隣に気兼ねをして、住んで、2年半。震災で傷ついた心は癒やせるはずもない。やむなく地域のコミュニティから離れ、移った人は、特に孤立を増していく。11月にも、故郷の復興の姿を見ることがなく、仮設の一角で、そっと人生を終えた人がいた。

冬が長く他の地域から孤立しがちな東北の田舎に住む者は、寡黙で自立心が強く、他人に頼ることなく支え合って生きてきた。そのコミュニティはずたずたに寸断され、プライドも何もかもが、なくなった。

だから、Stand by me. そっと寄り添う支援が欲しい。何も言わなくてもいいし、特別の言葉は要らない。「おはよう」「こんにちは」だけで、いい。忘れない、こころ。そっと見守る、こころ。



プロフィール 1959（昭和34）年、愛知県生まれ。1988（昭和63）年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。東北大学助手、助教授などを経て、2001（平成13）年から現職。同大学多元物質科学研究所長補佐も兼任する。（公財）みやぎ環境くらしネットワーク（MELON）理事、東北大学地域復興プロジェクト「HARU」顧問、トリー東日本大震災・市民とボランティアのつどい「実行委員会委員」長など幅広く活動している。

HIVとともに生きる

安心して病を発見し

安心して病とつきあえる社会をめざして

池上^{いけがみ}千寿子^{ちずこ}さん（NPO法人ぷれいす東京理事）

HIV／エイズについての啓発とHIV陽性者のケアを柱として活動する「NPO法人ぷれいす東京」をたちあげて今年で20年になります。

この20年間でエイズをめぐる大きく変わったことがひとつあります。それは医学的環境で、1996年からさまざまな抗ウイルス剤が開発され、その服薬によりHIVに感染してもエイズを発症しなくても可能になったのです。服薬によりHIVの増殖を抑えて免疫の低下も防ぐのでエイズの発症にはいたりません。HIV感染ⅡエイズⅡ死ではなくなったと言えます。医療的には「コントロール可能な慢性疾患のひとつ」になりました。とはいえHIV感染に気づかず、エイズ発症にいたってしまうこともあるわけで、「早期発見 早期治療」がとても大事になりました。

一方、HIVとともに生活することが長期化するにつれ医療だけでは解決できない問題が大きくなってきました。とくに性感染は不特定多数との性行為が原因という誤ったイメージのために、性感染Ⅱ遊び人Ⅱ自己責任として社会的な無視や排除につながりかねません。

その結果、HIVとともに生きる人の多くは感染の事実を周囲に伝えることが困難になり、隠したまま服薬、就労、学業を続けざるをえなかつたりします。周囲に言えないというところは「言ったら不利益につながりかねない」からで、現実には自分の感染を開示した結果、就労や学業の継続が阻まれるケースが現在もあります。

これは人権侵害であり、HIV感染を理由とした解雇は無効という判例があるにもかかわらず繰り返されています。医学的

には根拠のない診療拒否もまだにあります。HIV感染の告知をうけて治療につながったにもかかわらず、生活者として社会に貢献していく道が閉ざされるとしたら、本人はもとより社会にとっても損失ではないでしょうか。

「NPO法人ぷれいす東京」は「だれもが安心して病を発見し、安心して病とつきあいながら生きてゆける環境作り」をめざしています。高齢社会では病と無縁の人はいません。どのような健康状態であろうと自分の力を発揮していのちをつなげてゆける社会が求められていると思います。

プロフィール 1982（昭和57）年、ハワイ大学「性と社会太平洋研究所」でセクソロジー（性科学）を学び始めたころにエイズを知る。1991（平成3）年に帰国し「ぷれいす東京」を設立。2006（平成18）年に国民間として初の日本エイズ学会会長を務める。2005（平成17）年にエイボン女性教育賞。主著に「思いこみの性、リスキーなセックス」（岩波書店）など。

鉄くず拾いの物語

(2013年・ボスニア・ヘルツェゴビナ、フランス、スロベニア)

試写室

ボスニア・ヘルツェゴビナで暮らす*ロマのナジフと妻のセナダは2人の娘と共に暮らし、セナダは3人目を身ごもっていました。ある日、セナダは腹痛に苦しみ、ナジフは彼女を病院へ連れて行きます。流産が判明し、すぐに手術しなければセナダの命に危険があると告げられます。しかし、ナジフは高額な手術代を用意できません。鉄くずを拾ってもわずかなお金しか集められないナジフは「なぜ神様は貧しい者ばかりを苦しめるのだ、どうしたらいいのかわからない」と嘆きます。地域、親戚の援助もあって何とか最悪

の事態を打開しましたが、薬代と電気代を捻出するためにボンゴツのマイカーを鉄くずにしてしまいます。誰に怒りを向けることもなく働き続けるナジフの誠実さ、優しさに救いを感じるとともに、悲惨な戦場を体験した彼に何の恩給もない社会福祉について考えさせられます。物語は実話を再現しており、当事者であるナジフ、セナダ夫妻が本人役で出演しています。3月8日から神戸アートビレッジセンターで公開されます。

*主にヨーロッパ各地で移動生活を送ってきた少数民族の自称



監督:ダニス・タノヴィッチ 出演:セナダ・アリマノヴィッチ、ナジフ・ムジチ 74分
問い合わせ▶神戸アートビレッジセンター TEL078(512)5500

情報ぷらざ

著名人のメッセージパネルを 人権啓発の催しに貸し出します

当協会では、人権を身近に感じてもらいたいという
願いを込め、協会の事業に関わりのあった著名人か
ら人権に関するメッセージを頂き、パネル「ハートフ
ル・メッセージ」を作成しています。県内の人権啓発
の催しに貸し出しています。

貸し出しについて

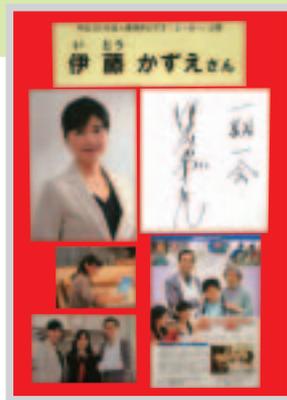
対象／県の機関、県内の市町、人権啓発
関係団体など

期間／原則として2週間以内

費用／無料(送料は自己負担)

方法／電話予約の上、指定の申請書を提出
※詳しくは協会ホームページをご覧ください

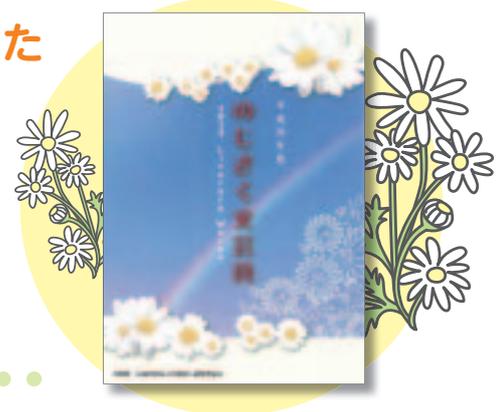
☎(公財)兵庫県人権啓発協会啓発・研究部
TEL 078(242)5355



今年度の「のじぎく文芸賞作品集」が完成しました

県民の皆さんの人権意識の高揚を図るため、兵庫県と当協会が毎年公
募する「のじぎく文芸賞」。このたび、平成25年度の最優秀賞4編、優秀
賞7編を収録した作品集が完成しました。図書館や市役所等の公共施
設、県立のじぎく会館などで閲覧することができます。

☎(公財)兵庫県人権啓発協会啓発・研究部
TEL 078(242)5355



イベントガイド

追悼の祈りと 希望のコンサート

●日時／3月23日(日)14:00開演(13:30開場) ※5,000円(前売り4,500円)

●場所／県立芸術文化センター ※阪急電鉄「西宮北口」駅から徒歩約2分

●曲目／F.シューベルト:アヴェ・マリア Op.52-6 D.839

W.A.モーツァルト:ミサ・プレヴィス 二長調K.V.194 ほか

●出演／寺本郁子(ソプラノ) ほか アルカディア室内管弦楽団、同室内合唱団、同グローバル合唱団
プロデュース:中村八千代

●問い合わせ／(公財)アルカディア音楽芸術財団 TEL0797(34)4333

ハーフ タイム

取材で初めて助産所を訪ねました。毛利多恵子所長は、赤ちゃんが誕生する様子やその素晴らしさにつ
いて熱心に話してくださいました。この世に生を受けた一人ひとりの赤ちゃんがすくすくと成長し、充実
した人生を歩める社会であってほしいと心から願います。現在の社会では、悩み苦しんで自殺に追い込
まれる人が多くいます。悩んでいる人は、一人で抱え込まずに相談窓口などを頼ってほしいと思います。
また、ゲートキーパーのような考え方が浸透し、誰もが互いのことを気に掛け、自然に支え合えるよう
になることが大切ではないかと考えます。(小池)